

要介護状態の姑と 嫁の関係を 円滑に保つ援助とは

事例提出者

Eさん（訪問看護ステーション・看護師）

ケースの概要

クライアントのSさんは平成11年10月、脳梗塞にて右片麻痺、失語症（運動性失語、失書、失読）となった。A病院に治療・リハビリ目的で入院するも、改善せず退院。その後、平成12年11月、自宅での介護困難にてB病院に入院。しかし、介護者である夫ががんで余命数か月とわかり、家族（息子夫婦）は残された時間を夫婦で過ごさせたいと在宅介護を希望し、退院することとなった。平成13年7月に夫は永眠。Sさんはリハビリには消極的で、入院はしたくないと思っている。家族は通所リハビリ、訪問看護などの社会資源を用い、在宅生活を維持させたいと考えている。自宅では、嫁が身の回りの世話をしており、週に数回親類（Sさんの兄姉など）も来て世話をしている。

嫁は、クライアントが親類に不満を訴えるため、親類から責められる。「私には、何も言ってくれない。どうすればいいのかわからない」と困っている。夫に話を聞いてもらい、協力してもらっている様子うかがえる。

Sさんは、現在通所リハビリテーションと訪

問看護を利用し、在宅生活を過ごしている。

クライアントの状況

Sさん、女性、昭和11年生まれ（66歳）

既往歴：糖尿病

疾患名：脳梗塞による右麻痺、失語症、閉塞性動脈硬化症、

要介護度：要介護2

生活歴：倒れるまでは、夫、長男家族と同居。仕事もしていた（事務職）。

性格：夫の話になると涙ぐむが、日頃は明るい性格で笑い顔がよくみられる。

身体状況・精神機能面：失語症がある（詳細は不明）。聴覚理解は良好であり、こちら側の指示・説明に対する理解力は高い。発語はないものの、ジェスチャーや表情を用いた自発的な訴えもあり、痴呆等の著しい精神障害はないと思われる。

運動機能面：麻痺側（右側）上肢は重度の麻痺が残存しており、自動性乏しく実用性はない。下肢については、協調的な運動のコントロールは困難であるが、立位・歩行時の体重支持は何とか可能な状態である。健側（左）の状態は筋力および運動性ともに良好。

基本動作・ADL能力：立位保持・歩行については、バランス不良であり、平行棒内であれば可能なものの、実用性は乏しい状態である。ペ



スーパーヴァイザー・奥川幸子氏を招いて開かれた事例検討会の模様を紹介します（検討会及び事例の内容は、誌面の都合及びプライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました）。

ベッド上および車いすを用いた基本的な動作は、すべて自力で可能である。ADL能力としては、入浴に介助必要とするものの、自宅はバリアフリー住宅であり、車いすにて家屋内自立レベルである。

その他：右肩・両膝に運動時の疼痛あり。

住宅環境：2階建てで日当たりもよく、1階は玄関からトイレまですべてバリアフリー。息子家族は2階を使用している。食事等は一緒にとっている。転居して1年程度であり、まだ近所の方との交流をもてないでいる。

家族関係等：5人暮らし。息子が勤めに行っている間は、嫁とクライアント、孫2人と生活している。嫁は二人目の産後の日立ちが悪かったらしく、子どもと2階で過ごすことが多い。近所にはSさんの親類（兄妹等）が多く住んでおり、時々訪問してはSさんの身の回りの世話や入浴介助までしている。通所リハビリテーション・訪問看護でも入浴してもらっているが、本

人はそれだけでは不満らしい。嫁としては、親類が世話をし過ぎることに不満をもっている様子。Sさんは、同情されたいのか病気からか不明だが、時々号泣して親類に「嫁は何もしてくれない」と訴えている。

援助の経過

平成13年6月3日

サービス利用開始。通所リハビリテーションを週3回利用。通所リハビリ来所時に外来受診を行う。

7月12日

夫、入院中の病院にて死去。

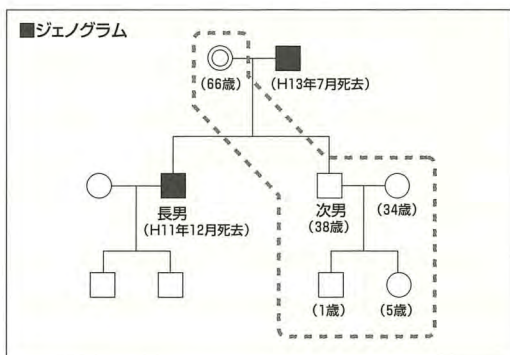
8月18日

訪問看護の依頼あり。ケアマネジャー、訪問看護師にて事前訪問する。主に、入浴介護後にリハビリを取り入れることとなる。

平成14年2月25日

家族としては、入浴中だけのリハビリだけではなく、身体機能のレベルアップを希望される。ケアマネジャー、OT、訪問看護スタッフにて検討を行う。OTの見解では、「これ以上のレベルアップは望めず、現状維持しかないとと思われるが、できる限り家族の希望に添うようにしましょう」とのこと。ベッド上での関節可動運動、廊下での起立訓練を追加する。

3月1日



訪問時にクライアントから訴えあり。患足を気にしている。右足背の浮腫は以前からあったが、少し赤い湿疹が見られる。痛みがないのなら、様子を見るようにとクライアントと家族に伝える。

3月2日

家族より電話あり。「昨日言われたことが気になり、本人は診察を希望している。鼻汁、咳も時々出ています」との由。今日は通所リハビリの日なので、外来を受診してもらうことにする。

3月8日

本人は、風邪について質問すると首を横に振る。そして嫁のほうを指示し口元に手を置いて、シーとジェスチャーする。（「風邪ではない。嫁に聞こえないようにしてほしい」と訴えている様子がかがえる）。

3月13日

家族より電話あり。「朝から風邪をひいたようなので、薬をください」との由。医師の指示にて3日分の処方あり。

4月15日

入浴後、鼻をすする動作がみられる。左鎖骨突起した骨あり。「数日前は痛みがあったが、現在はなし」との由。翌日の通所リハビリ時に診察を希望する。

4月27日

左鎖骨部痛み、熱感腫脹、風邪症状認めず。家族から「落ち着いているみたいです」との由。

5月15日

訪問時、左足背内出血・腫脹・疼痛を認めた

ため通所リハビリに連絡する。家族は気づいていない。本人が「言うな」とジェスチャーする（本人のいないところで家族に右足背の症状と、医師へ診察をしてもらうことを伝える）。

5月20日

訪問で診た時には（家族とともに）右足背腫脹認めなかったが、通所リハビリからの連絡で「ひどくなっている」とのこと。診察で本人が「また捻挫した」と言ったとのこと。医師より、リハビリの方針もあるので整形外科受診の指示。ケアマネジャーがプランの調整を行い、家族に伝える。

5月22日

家族とともに近医整形外科受診。診断名：右第2足指亀裂骨折、シーネ固定中。介助の注意：ケアサービスは続けるが入浴はシャワー浴とし、シーネをしているのでバランスが悪い。移動動作時等、十分気をつけながら看護する。

6月1日

訪問の帰り、本人のいないところで、家族（嫁）より「相談があります」と言われる。「母は、私を気に入らずにいます。何も訴えてくれません。主人とはできるだけことはしていきこうと、いつも話し合っています。親類もいますし、恥ずかしいことはできない。しかし、どうしたらいいのかわかりません」

6月19日

再度、右足背浮腫を認める。家族もすぐに対応され、整形外科に受診される。骨折は治癒しているが、高齢でもあるので、症状がとれるの

には時間がかかると説明があったとのこと。

7月1日

今月から2名で訪問し、バイタルチェック、リハビリ中ではもう1名の看護師が家族に対応し、傾聴することとする。

7月16日

7月は、クライアントのご主人の初盆であった。その時、親類にクライアントが号泣して「痛い。何もしてくれない」等と訴えたため、親類から家族が責め立てられた。「夫が説明はしてくれたが、きつい思いをした」と嫁。「親類の方は、クライアントの日頃や病気をはっきりと理解しているわけではないので、気を落とさないように……」と助言する。

7月21日

嫁の話を訪問看護師が傾聴するようにしてから、嫁は明るくなった感じがする。

考察

嫁と姑という関係は、健康な人同士であっても諍いが起こりがちである。このケースの場合、クライアントが失語症のため、意思の疎通ができにくい。加えて、親類がクライアントのタンスの整理までしたりすれば、嫁としては苦痛も大きいただろうと思われた。クライアントは、通所リハビリ・訪問看護とケアサービスを受け、話を聞いてくれる親類もいて、精神的には落ち着いている様子であった。しかし、嫁には味方になってくれる立場の人は夫だけである。また、次男の嫁であるにもかかわらず、クライアントの長男の死、義父の死、第2子出産のなかで義母の介護を行うのは大変だったろう。私たちの立場でどの程度まで介入ができるのかはわからないが、このまま親類の援助を受け入れながら、嫁の立場を配慮しつつ支援を続けていく方向がよいのではないかと考えている。

ケース検討会

奥川 Eさんがいま一番引っかかっているのはどんな点ですか。

Eさん Sさんとお嫁さんが仲よくできないのがとても残念です。どちらも一生懸命頑張っているし、二人ともいい人なんです……。どうアプローチすれば、嫁と姑の関係がよくなるのか、手探り状態です。

奥川 では、今日はこのお二人の関係に焦点を絞って検討していいですか。

Eさん はい、お願いします。

奥川 では、この二人がどんな状況に置かれているかをアセスメントし直すところから、今後のアプローチの仕方を考えていきましょうか。

Eさん よろしくお願いします。

奥川 それでは、この嫁と姑が置かれている状況を浮き彫りにするための情報を、Eさんから引き出してみてください。

嫁、姑、親類の関係性を探る

発言 以前から嫁と姑の折り合いが悪かったのでしょうか。

Eさん 一緒に住む前は年に数回会う程度だったようですが、決して悪い関係ではなかったようです。

発言 Sさんのほうは、同居することに不満や抵抗などがあるのでしょうか。

Eさん 同居すること自体には納得しておられます。自分のために次男さんが家を建ててくれたことも理解しています。

発言 次男と同居する前は、どのような生活をしていたのですか。

Eさん 長男が亡くなるまでは長男一家と同居していました。平成11年の秋に長男が事故で亡くなると、長男の妻は子どもを連れて実家に戻りました。

発言 長男一家と暮らしていた時期の、嫁・姑の関係はどうだったのでしょうか。

Eさん 私が接触もったのはお嫁さんが実家に帰った後ですので、よくわかりません。

発言 Sさんは失語症とのことですが、どのように意思の疎通を図っているのですか。

Eさん 書いてあるものは読めないのに、文字盤なども使えません。言葉による問いかけにジェスチャーで答えてもらうというかたちです。



発言 では、Sさんの気持ちというのは、ジェスチャーを見た側が推測しているということですか？

Eさん まあ、そうです。

発言 では、「嫁が何もしてくれない」というのも、周りがそう推測しているということでしょうか。

Eさん 何もしてくれないと思っているかどうかはわかりませんが、お嫁さんのことをあまりよく思っていないのは確かなようです。なぜ嫌っているのかということころまでは、つかめていませんが。

奥川 Sさんのコミュニケーション障害の程度をSTに評価してもらったことはありますか。

Eさん いえ、ないと思います。

奥川 その点はきちんと押さえる必要がありますよ。こういうクライアントの場合、専門家にしっかりみてもらって、本人の理解力や障害の程度を把握しておかないと、周囲が不必要に振

り回されたり、言動を誤解したりしてしまいがちですから。

Eさん はい、わかりました。その点は私たちも不安に思っているところでした。ケアマネジャーにも話をしてみます。

発言 親族とお嫁さんの関係は、どのような感じなのでしょう。

Eさん そのあたりのことにどこまで介入していいのかわからないので、親族にお嫁さんのことをどう思っているかと聞いたことはありません。お嫁さんのほうからは、親族の悪口などは一切聞かれません。

発言 親族はSさんに対して、どんなことをしているのですか。

Eさん かなり頻繁にやって来ていて、訪問看護が入浴介助をする日以外にも、親族の方が入浴させたりしています。先日も押し入れを開けて春物と夏物を交換していました。お嫁さんは廊下に立って、その光景を遠くから見ています。

発言 親族は以前からSさんのところを訪れていたのですか。

Eさん 詳しくはわかりませんが、わりと田舎なので、Sさんが元気な頃から交流は盛んだった

ようです。Sさんは6人きょうだいの末っ子で、よく来ているお兄さんが「一番若いのに、こんな身体になった上に夫も息子も亡くして可哀想だ」とおっしゃっていたことがあります。

奥川 今住んでいる家を次男が建て始めたのはいつですか。

Eさん Sさんの夫ががんで余命幾ばくもないとわかってからすぐです。もともと2人目のお子さんが生まれることもあり、そろそろ建てようと考えていたようです。

発言 家の建築資金は、どのような割合で出されているのかわかりますか。

Eさん 建設資金の内訳までは聞いていませんが、ローンは次男が払っています。

発言 次男の年収と家の大きさや立派さは釣り合いがとれていますか。

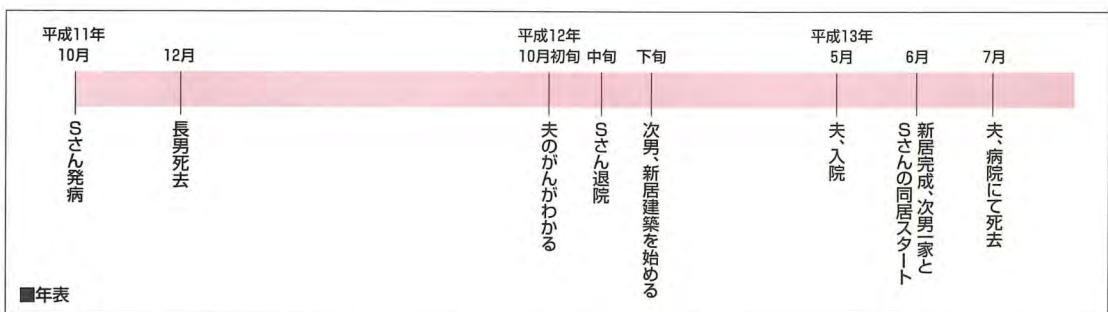
Eさん はい、釣り合っています。

発言 長男一家と同居していた家は借家だったのですか。

Eさん そうです。

発言 新居は、次男一家が以前住んでいた近所なのですか。

Eさん いえ、Sさんと一緒に暮らすなら、S



さんの兄姉が近くにいるところがいいだろうということで、以前の次男の住まいからは車で1時間ほど離れたところに新居を建てています。

奥川 家を建てている時、お嫁さんは妊娠中だったんですね。

Eさん はい。

奥川 では、ここまでの情報を時系列で整理してみましょう。Sさんの発病前はこの方たちはどんな生活をしていて、どういう時期に嫁と姑は同居を始めることになったのか。Eさんに年表を書いていただきますよう。

嫁——慣れない土地、妊娠、期待される役割

奥川 Sさんの発病と前後して長男が亡くなっていますね。その後、すぐに嫁は子どもを連れて実家に帰ったんですか。

Eさん そのようです。

奥川 Sさんと夫が暮らしていた期間が1年くらいありますが、その間、生活面での援助は誰かがしていたのですか。

Eさん 次男とお嫁さん、それとSさんの兄姉たちががしていたようです。

奥川 なるほど。Sさんが次男夫婦と同居する前から親族は手伝いに来ていたのですね。

Eさん はい。

奥川 新居に移るとき、お嫁さんは妊娠何カ月でしたか。

Eさん 逆算すると、生まれる前後だと思います。今思い出しましたが、お嫁さんが動けない

ので、引っ越しの時もSさんの兄姉が全面的に協力したそうです。

奥川 それで何がどこにしまってあるかも知っているんですね。

Eさん そうだと思います。

奥川 ということは、実質的には親族が整えた家なんですね。お嫁さんとしては、自分の家であっても、そうではないような感じがしているかもしれませんね。お嫁さんは親戚に頭が上らない感じですか？

Eさん 田舎なのでいろいろな行事が多いのですが、長男が亡くなっているために、次男が長男の役割をしている関係で、お嫁さんにも長男の嫁としての働きが求められています。もともとの地方の方ではないため、親戚からは「何も知らない嫁だ」とか、「長男の嫁として、もっとしっかりしてもらわないと困る」といったようなことを言われているようです。

奥川 そうすると、このお嫁さんが置かれている状況は、どのようなものですか？

Eさん 相当重圧がかかりますね……。

奥川 もともと出身地ではない土地で、さらに知り合いのいないところに引っ越して、姑の親戚に取り囲まれ、その上出産。鬱になってもおかしくないような状況ですね。

Eさん たしかに、私たちが訪問した当初は、お嫁さんは2階から降りてこようとしませんでした。訪問が重なるなかで徐々に顔を見せてくれるようになり、会話も増えていきました。ただ、一人で訪問するとどうしてもSさんのケア

だけになってしまうので、この1カ月ほどは2名で訪問するようにして、一人はお嫁さんと話をするようにしました。そのせいか、最近はとも明るくなってきています。

奥川 とてもいいですね。そういう援助を、お嫁さんが置かれていた状況をきちんとアセスメントした上で計画的にできるようになると、もっといいですよ。

Eさん はい。

発言 次男は自分の母親と妻に対して、どんなふうにかかわっているのですか。

Eさん お嫁さんが辛い立場に立たされないよう、言うべきことはしっかり言っています。

奥川 夫がしっかり守っているわけですね。その点は、お嫁さんにとっては心強いですね。

姑——喪失体験の連続

奥川 では、次にSさんが置かれている状況を考えてみましょう。発病から同居、そして現在に至る期間は、Sさんにとってどんな時期だったと思いますか。



Eさん 旦那さんや息子を亡くしたり、まさに波瀾万丈の時期だったと思います。

奥川 そうですね。いろいろなものを喪失してきた時期ですよ。自分の身体機能と言語機能を失い、それまで続けてきた仕事も失った。前後して長男を事故で失い、夫まで病気で失った。ものすごく大きな喪失体験の連続です。そういうなかでは、当然やりきれない感情や怒りの感情が湧いてきますよね。

Eさん たしかに……。

奥川 つまり、Sさんとお嫁さんが新居での同居というかたちで出会ったとき、二人はそれぞれ喪失体験の連続のなかで危機的状況にあったわけです。そういうシチュエーションで、Sさんのやり場のない怒りはどこに向かうと思いますか。いちばんぶつけやすいのは、他人じゃないですか？

Eさん それがお嫁さんだった……。

奥川 そう。一般的に言っても、嫁という立場はスケープゴートにされやすいんです。でも、このお嫁さんは夫が守ってくれていますし、Eさんたちの援助もある。そして、何より若いのですから、もう立ち直ってきています。状況が少し動こうとしているわけです。こういうなかで、Sさんにどうアプローチしていけばいいのか。Eさんにアイデアを差し上げてください。

発言 まずはSさんのコミュニケーション障害の程度をSTにきちっとみてもらうことが大事だと思います。

奥川 重要ですね。その点は絶対に押さえてお

く必要があります。その上で実際にかかわる時、Sさんのような方にはどんなふうに接すればいいでしょう。

発言 経験上、Sさんがゼスチャーで表現している内容をプラスに解釈していくと、自然とそうなることが多いです。「お嫁さんが嫌いな？」という方向ではなく、「お嫁さんに心配させたくないんですよ」といったように。



奥川 そうですね。こちらがネガティブに受け取って返してしまうと、余計にSさんのなかでマイナスの感情が増幅してしまいます。行動療法的にいい方向へもっていくようにして、できれば義理のお母さんとしての地位も渡せるといいでしょうね。

Eさん そういえば、Sさんは、今のような身体になっても、家のなかの掃除はご自分でなさるんです。車いすや、時には這ってでも隅から隅まで掃除をしていらっしゃる。

奥川 すごいですね。力がある方なんですね。

Eさん 3人で話をしたときに、お嫁さんも「すごいんです、母は」とおっしゃっていました。

奥川 その時、Sさんはどんな表情をしていましたか。

Eさん 嬉しそうに、ニコニコしていました。

奥川 そういう時はSさんに「素敵なお嫁さんですね」と言葉をかけるといいですよ。

Eさん なるほど。

奥川 お話を聞いていると、そろそろお二人とも上向きの流れに乗りつつあるようですね。そういう時、我々援助職者は、「よき媒介者」になればいいんです。変に介入しようとせずに、二人の関係がプラスの方向に向かうような触媒となればいいんです。

発言 それと、親戚の方たちがしてくださっていること自体は、Sさんにとってもお嫁さんにとっても助かる面が大きいのではないかと思います。ですので、援助職者としては嫁と姑の関係改善に力を注ぎ、息子さんにも協力してもらいながら親戚の方たちのお嫁さんに対する認識を徐々に変えていくようにしていくことが大切なのではないでしょうか。

奥川 そうですね。いまおっしゃったことは、Eさんが考察に書いていることですね。つまり、Eさんの臨床家としての勘は当たっているわけです。ただ、今日検討してきたように、手元にある情報を整理・分析して背景を十分に理解し、理屈をつけられるようになれば、自分の援助により確信がもてるようになりますよね。

Eさん はい。皆さんと一緒に振り返ることで、もやもやしていたことがスッキリしました。今日はありがとうございました。